ばく通信　No.9

2017．6月　　特定非営利活動法人　発達障害児応援団　ＮＰＯばく

平成 20 年に開設したＮＰＯばくも 10 年目の節目の年を迎えました。支援をした子ども達は 134 人。開設当初、5 年未満でやめるＮＰＯが大半といわれていました。公的な援助を受けていないＮＰＯが続けられるのは、ばくを必要としてくれる保護者の願いと、支援を通じて変わっていく子どもの姿…そして、賛助会員の皆様方の温かい応援のおかげです。今年度は、多様なニーズにこたえるために、新しい企画にチャレンジします。今後もばくの活動にご支援を賜りますようお願いします。

＜新しい企画＞

その１　終了生の保護者へのアンケート調査（困ったことや有効だった支援等）

その２　10 周年記念パーティー（8 月 22 日　ばくのスタッフと終了生及び通室中の保護者との懇親会…アンケート調査の結果報告と、育ってきた道筋をいっしょに振り返り、支援のあり方を考える機会にしたいと思います。）

その３　不登校児童生徒の学習支援（訪問指導とばくでの昼間の指導）

賛助会員の皆様とスタッフの情報交換＆勉強会を以下のように予定しています。終了後に懇親会も企画しております。駐車場に限りがありますので、できるだけ公共交通機関の御利用をお願いします。(場所や日程を変更する場合もありますので、開催日が近づきましたらお問い合わせください。)

7 月 31 日（月）18：00～19：00	事例検討会
11 月　3 日（祝）10：00～12：00	学会から学んだこと(伝達研修)
12 月 22 日（金）10：00～12：00	検査結果の見方
3 月 19 日（月）17：00～19：00	事例検討会

今年度在籍（2018 年 6 月現在）

・入 室 児　　37 名（不定期指導 1 名を含む）

・スタッフ

指導担当	12 名　教員経験者、特別支援教育士、臨床発達心理士
相談担当	７名　臨床発達心理士、臨床心理士、社会福祉士 ３名は指導担当との兼任
合計	16 名

活動報告　“ＬＤへの気づきが支援の要だった”

Ａ君（支援期間　小 4～小 6）

高校卒業とその後の進路報告に来てくれたＡ君、小学校時代の苦戦の時期とは打って変わったさわやかな笑顔は私達を幸せな気持ちにしてくれた。そこで、「覚えている？勉強がいやだと言って、車の中に立てこもっていたこと。」と問うてみた。Ａ君は『覚えています。あれは、早い反抗期でした』と。

Ａ君が登校を渋りだしたのは小２の終わり。なめらかな話し方から、カタカナや漢字の読み書きの習熟に困難があることに気づいてもらいにくかったようだ。出来ない自分とうまく付き

合えないことで、武器や戦争映画にのめりこみ、学校の敷居が高くなっていった･･･悪循環の典型例ともいえる状況のなかで、ばくでの指導が始まった。

こだわりを教材に利用する等の指導の効果が出始め、読み書きへの拒否的な態度が軽減。カタカナの使用がスムーズになった時期(小５秋)と重なるように学習意欲もあがっていった。３年間の指導の中で、保護者も本人も、学び方のペースや方法をつかんでいった経緯は、子どもの発達の可能性と同時にＬＤへの気づきの難しさを実感させるものだった。

Ｂ児（支援期間　小１後期～小２）

“読み書きの習熟が遅い”が主訴。入室時(１年生)の読み書きスクリーニング検査では目立った特徴はなかったが、母のニーズをもとに、国語、算数の定着を目的に指導を行った。カタカナや漢字の覚えにくさは若干あったが、ことばで意味づけするとよく覚えられていた。算数は、文章問題の意味を正確に捉え、立式することができた。

その後実施したＭＩＭによるアセスメントでは読みの流暢性に課題がみられた。そして、疲れやすさや集中の短さもうかがえた。しかし、社会性もあり、丁寧な説明があれば学習理解も可能であり、年齢相応に学習が定着していることから、この時点でＢ児のＬＤの強さは感じとりにくかった。

２年生になって、検診での斜視の疑いの指摘により、専門医を受診した。Ｄｒ.の見立ては重度のＬＤ。診断によって、私たちの指導もＬＤの重さを意識したものになった。また、教材の提示の仕方（情報のカットやクローズアップ）によって、集中の持続や疲労度に差が生じるのか、小さな拒否や満足感などの表れとの関連を見る手がかりにもなった。

Ｂ児は“わからない、疲れた”を訴えつつも、指導者の教材の工夫や励ましのなかで、前向きに読みの力を成長させていった。困ったときの対処方法（色つきしおりなどの具体的なサポートツールの利用）を手に入れたこと、わからないと思った時にはまず知っていることに目を向けるという考え方や、自分の能力への自己理解がすすんだことが成長への足がかりだったと考える。

Ａ君やＢ児から私たちが学んだことは

低学年でのＬＤの困り感は他者に分かりにくい。とりわけ、本人がまじめで非常に努力をしている場合、学力(ひらがなや計算の習熟)が努力によって維持されていることには気づきにくい。そして、自分の学びのペースに比べて、集団学習のテンポが速くなるとき(２年生～３年生)、息切れが起きてくる。私達大人は、子どものつぶやき「疲れた」「分からない」「めんどくさい」の訴えを真摯に受け止め、共に考えていくことが大切だと改めて思った。

子ども達が困り感を素直に訴えられるには、指導の中で培われる関係性(信頼感や安心感)が必要であり、同時に困り感に気づき、それを伝える保護者の力も重要だと思う。

発達凸凹(発達障害)のある子の生きていく道は平坦ではない。しかし、保護者そして本人が、“困ったこと、気になっていること”を伝えることが支援を豊かにしていく。困り感が否定されないよう、私たちのＮＰＯができることは、その“困り感”を一緒に考え、より良い解決方法を模索し、発信していくことだと思う。

（※報告にあたってはＡ君とＢ児の保護者及びＡ君の同意を得ています。）

静岡県静岡市駿河区大和２丁目６番５号　東京堂ビル 305 号
電話・FAX：054-266-5616（火～金曜日　15 時～19 時 30 分）
賛助会費振込先：郵便口座番号 00810-6-134767　　発達障害児応援団ＮＰＯばく
（一口 1000 円、何口でも）
E-mail:baku@orion.ocn.ne.jp　　URL：http://www.npobaku.sakura.ne.jp